「定置網就業への足跡 2002」
－都会の生活から田舎の漁師へ－

梶賀大敷株式会社
妻有　弘典

１．地域の概要

私が住んでいる梶賀町は、三重県尾鷲市の南端にある人口約２７０人の小さな漁村である(写真１)。リアス式海岸の入り江に集落があり、民家は肩を寄せ合うようにして急な斜面に建っている。市の中心までは車で４０分、県庁所在地の津市までは車で約３時間半かかる（図１)。

２．漁業の概要

梶賀地区では定置網、刺網、一本釣りなどの漁業が営まれている。なかでも１統設置されている大型のブリ定置網は、地区の重要な漁業で、地区の水揚げのほとんどを占めている。平成１４定置年度の水揚げはブリ、ワラサを中心に約３００トン、金額にして１億７，６８０万円と、定置網による漁獲としては三重県でもトップレベルを誇っている（図２)。また、梶賀浦漁業協同組合の組合員１０７名中、２２名が定置網の乗組員として働いており、地域の雇用の場として大変大きな役割を担っている。

３．実践活動課題選定の動機

私は昔から海がとても好きで、スキューバーダイビングの講師などをして働いていたが、今後の生活に不安や戸惑いを感じていた（写真２)。そんな１９９９年のある日、転機が訪れた。「海で働いてみないか？」と漁師に声を掛けられ、漁師は地元の人だけがなれるのではなく、自分でもなれるということを知ったのである。その日から、私の漁師への挑戦が始まった。

４．実践活動の状況

①漁業体験教室

漁師になることを決意した私は、インターネットなどを活用して、各地の漁業就業についての情報収集を行った。その中で、２００１年１１月に三重県尾鷲市で漁業体験教室が開催されることを知り、運良く参加できることになった。私は「出来ることがあれば積極的に手伝う」という目標を掲げて、これに臨むことにした。

当日は揚網の度にハリセンボンが大量に入っていた。(写真３)。乗組員の動きを見て私は、何度もハリセンボンを掬った。自分にできる仕事をとっさに手伝った結果であったが、その姿を見て将来性があると思ったと、後に社長たちは語ってくれた。

しかし、３泊４日の漁業体験教室では短すぎ、私は定置網漁業に焦がれるようになった。

②たったひとりの定置網研修

漁業体験教室を経て定置網へ興味が強く沸いて来た私は、梶賀大敷の厚意で研修を開始した。

定置網の出航時間は午前４時～５時なので、京都を夜の１２時に出発しないと間に合わない。週の前半は夜間に梶賀に駆けつけて定置網研修、週の後半は帰ってすぐに、生活費を稼ぐアルバイトへ出勤というハードな２重生活であった（図３）。

なぜこのような厳しい生活をしていたのか、不思議に思われるかもしれない。しかし、当時の私は、定置網漁業の経験を積むことはもちろん、梶賀大敷と自分との関係を保つことに必死であった。このような生活が約７ヶ月続いた。

そしてほとんどあきらめかけていた２００２年夏、梶賀大敷の社長から採用の話が飛び込んできた。この時は小躍りするくらい嬉しかったのを覚えている。

③梶賀での漁師生活

定置網漁業者の主な仕事は、一日二回水揚げする「網持ち」である（写真４）。現在、私は「側方」（写真５）という重要な持ち場を担当している。

操業での持ち場は順次替わっていくことになっており、同じ場所を受け持つ機会は年に４、５回とわずかしかない。定置網では覚えなければならないことが山のようにあるので、ノートに書きとめて、復習している（写真６）。

仕事はその他に網の修理や洗浄などがあるが、これらは操業の合間をみておこなう。定置網の仕事は午後２時頃に終わるので、それ以降は自由時間となる。現在、先輩漁業者からアオリイカ漁（写真７）とイセエビ漁（写真８）を教えてもらっている。一人前の漁業者を目指して、経験を積んでいるところである。

田舎生活で不自由に感じることは、案外少ない。自分には都会の生活よりも漁村での生活の方が合っていると思う。田舎では、地域活動、お裾分けなど、お互いに助け合って生きている。京都では近所だけの付き合いであったが、梶賀では人と人との結びつきが強く、村としての連帯感があると感じる。

５．波及効果

定置網の技術は、把握するのに最低３年、習得するのに１０年以上と言われる難易度の高いもので、一朝一夕で身に付くものではない。しかし、私が努める梶賀大敷の乗組員の約７割は６０歳以上であり、このままでは技術が潰えてしまう恐れまである（図４）。

このため、私は技術の継承者として、日々習得に努めるとともに、今後の梶賀大敷の担い手として、役割を果たしたいと考えている。

また、私はテレビ、新聞、PR ビデオ等（写真９）にとりあげてもらった。その機会を利用して漁業者を目指した経緯や田舎での生活を話してきた。特に、漁業者になる前に知りたかった情報に関しては、出来る限り伝えるように努めている。今後も引き続き、機会があれば積極的に PR し、新たな仲間の確保につなげたいと考える。

また、漁業の現場だけではなく梶賀地区でも高齢化が進んでおり、行事などに若い力

が必要になっている。このため私は、祭り（写真１０）、共同清掃、消防団などの地区活動へ積極的に参加するようにしている。自分から働きかけることによって、地区の活性化に貢献していきたい。

６．今後の課題

今後の漁村の就業対策を考えていく上で、それぞれの立場で取り組むべき課題がある。

まず、漁村から生活情報を発信していくことである。最近ではインターネットや求人誌をみて「漁師」を目指す人が増加している。漁業そのものについての情報は確かに充実してきているが、漁村生活に関する情報は不足がちで、実際に就業した場合の生活を具体的にイメージすることが困難である。このため、これからは私たち漁村の側から、生活感溢れる情報を提供していくことが求められる。

次に、漁村での就業者受け入れの環境を整えることである。漁業研修生や就業者にとって、宿泊施設の確保は不可欠であるが、漁村によっては困難な場合がある。そのような状況を改善するため、行政機関などが施設を確保、または斡旋することによって、不安のない受け入れ環境を整えることが必要である。

最後に、就業希望者が情熱を持って積極的に取り組むことである。漁村では、町、人、仕事のそれぞれが互いに強く結びついている（図５）。ただ仕事だけやっていれば、それだけで一人前の漁師として認めてもらえる訳ではない。一生懸命に漁師としての仕事をこなし、そのうえで地元に愛着を抱き、何が自分にできるかを常に考えて行動するといった態度が必要なのである。

私たち乗組員や村の人は、「ガムシャラ」にやってくれる仲間を求めている。

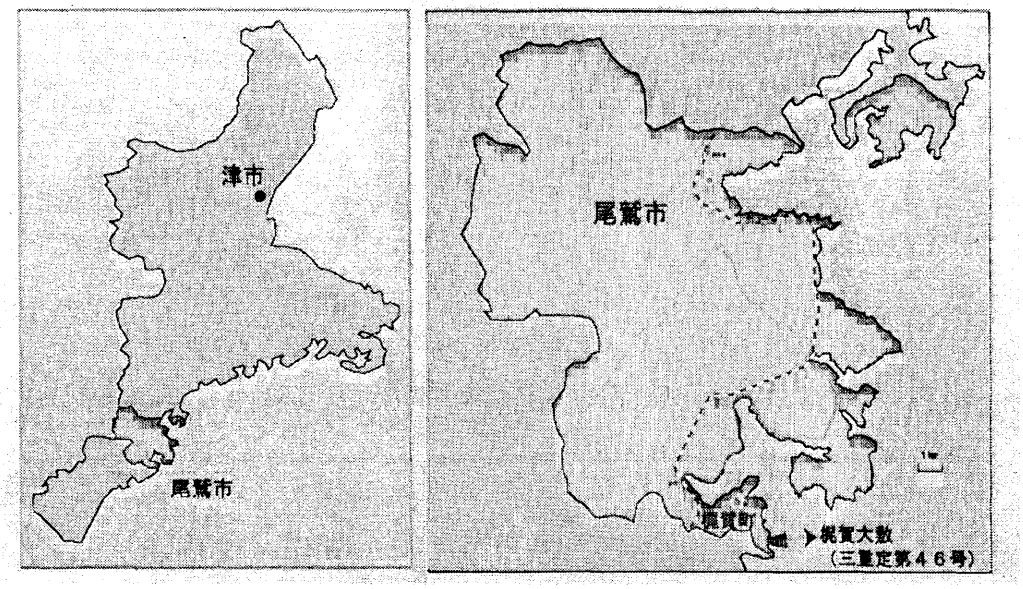

図１　梶賀町の位置

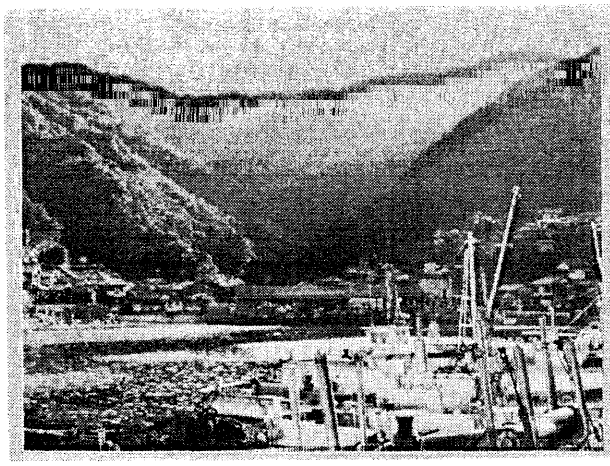

写真１　梶賀町の風景

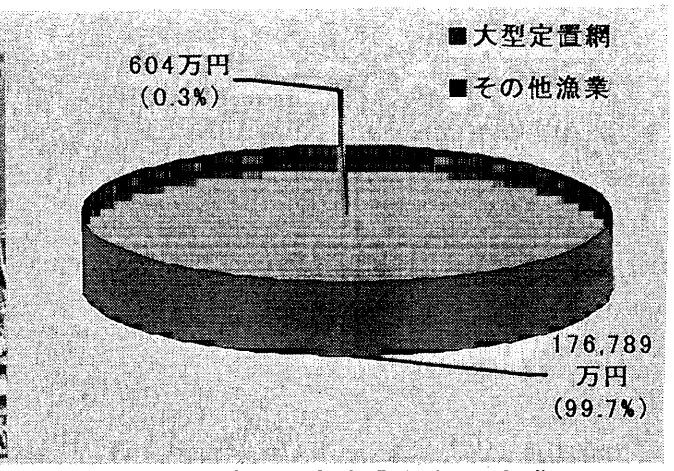

図２　平成１４度漁業種類別漁獲量

※その他の漁業は、刺網、一本釣り、採介藻など

写真２ ダイビング講師時代の私

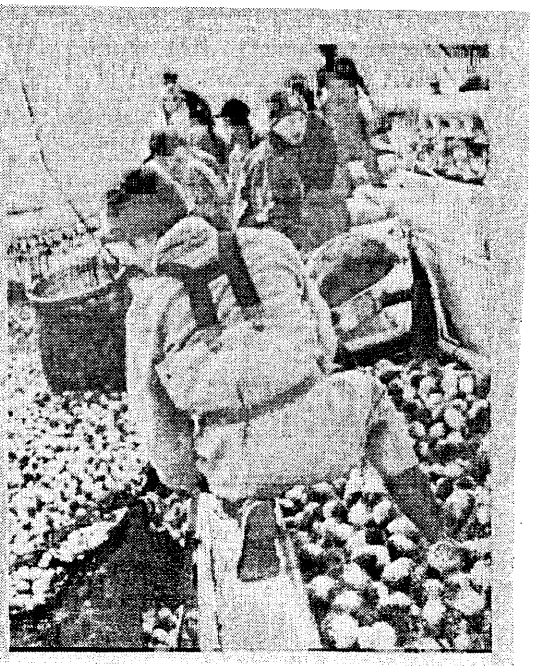

写真３ 漁業体験教室

図３　ひとりだけの定置網研修

写真４　定置網の操業風景

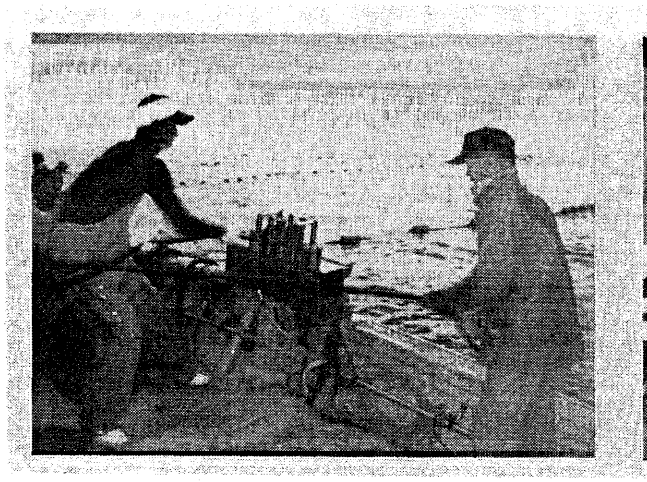

写真５　「側方」での操業の様子

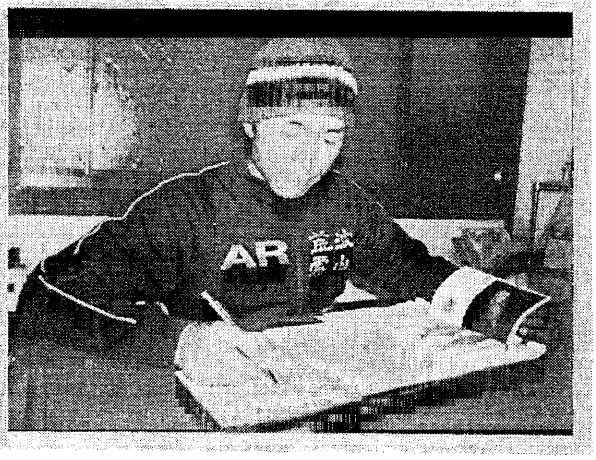

写真６　操業日誌の作成

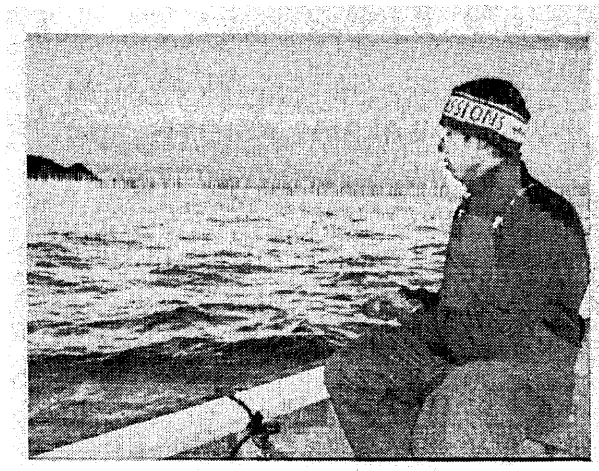

写真７　アオリイカ漁

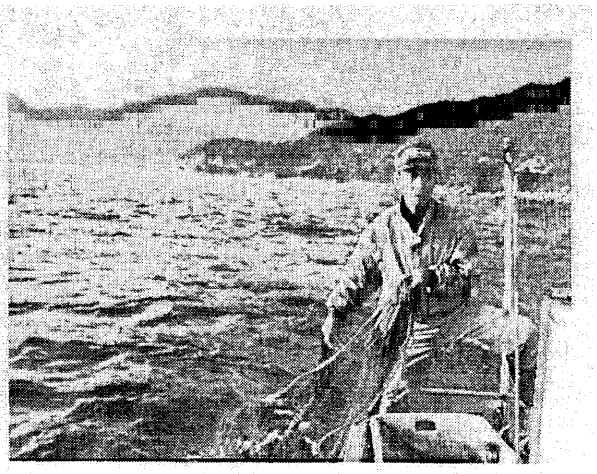

写真８　伊勢エビ漁

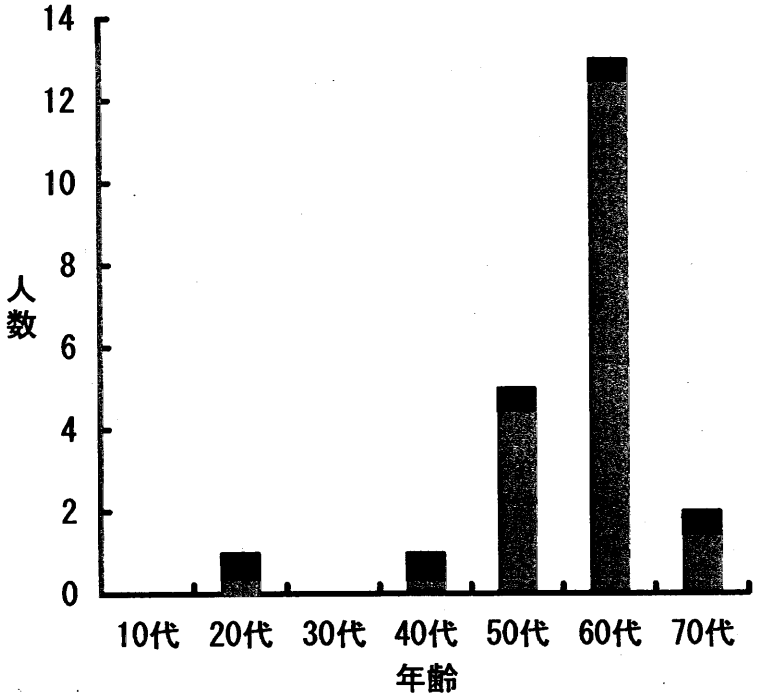

図４　梶賀大敷株式会社の年齢構成図

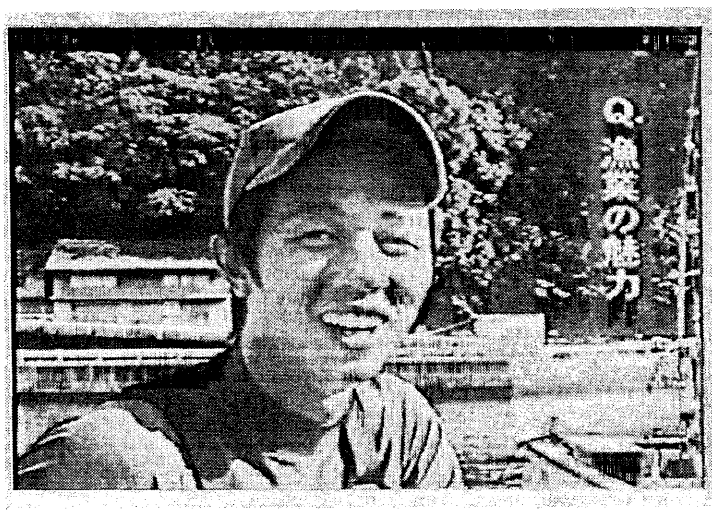

写真９　大日本水産会 PR ビデオより

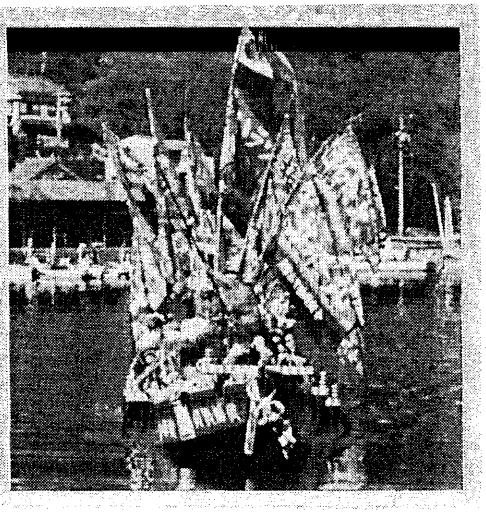

写真１０　ハラソ祭り

図５　私の提言－新米漁師の心構え－